特集 英語を学ぶ視点の育成

ことばを学ぶ上での気づきを大切に

森住 衛（桜美林大学）

はじめに

本稿の目的は，「英語を学ぶ視点の育成」を 2006（平成 18）年度版 *NEW CROWN*（以下，*18NC*）にどのように反映させているかを論ずることである。特に，ことばを学ぶ上での気づき，動機付け，学び合いという点で，具体的に教科書の題材や教科書構成でどのように工夫しているかを取り上げる。

英語科に限らず，ほぼすべての教科に共通することであるが，学習の対象になるのは，知識・技能・態度の 3 つである。このうち「態度」はしばしば「視点」とも置き換えられる。筆者も「視点」とか「観点」を使っている。この 3 つは相互に関係があり，重なり合うところもあるが，あえて区別して英語科に当てはめると，以下のようになる（cf. 森住「教科書を支える 3 つの理念」，『三省堂英語教育中学編』，1997.2）。

知識	知る	基礎・基本
技能	使う	コミュニケーション
視点	判断する	言語観

さらに，この知識・技能・視点を，教科書で取り上げる領域で大別すれば，言語材料・言語活動・題材になる。この 3 つは，しばしば，教科書分析を行う際の大きな分類項目と言っても差し支えない。つまり，「この教科書は言語材料をどう扱っているか」とか，「4 技能のバランスをとっているか」とか，「題材にどのような特徴があるか」などの議論のポイントということになる。本誌（*TEACHING ENGLISH NOW* 特別増刊号）では，1 号で「言語材料の基礎・基本」を中心に特集した。そして，2 号では「英語を使う技能の育成」を特集してきた。そして，本号では「英語やことば全体に対する視点の育成」を特集している。これで一連の 3 つの柱が出そろう。

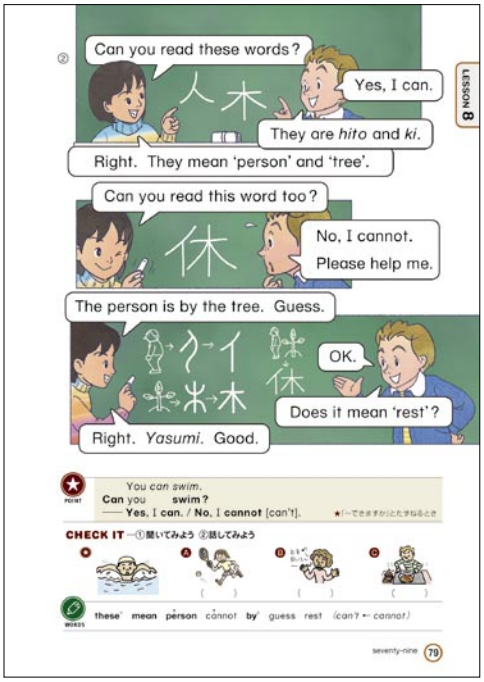
「視点」とは何か

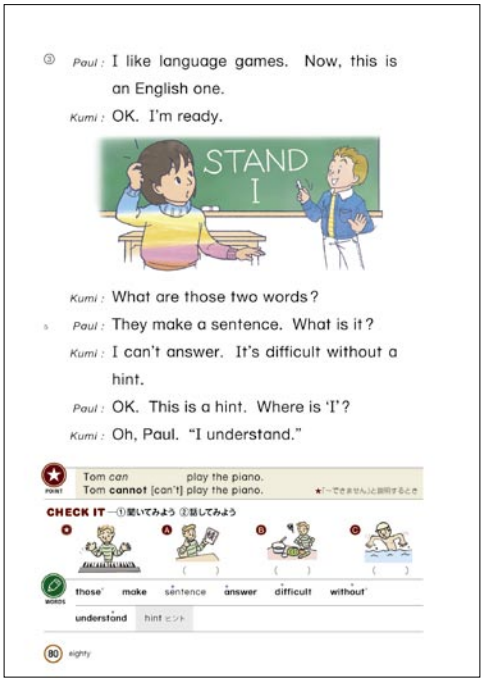
ことばに対する視点とは，一言で言えば，言語観である。左記の一覧でも「視点　判断する　言語観」と並べたのはこの由縁であるが，これだけではわかりにくい。言語観とは，極言すると，次のような判断に対してどう対処するか，簡単にいえば，Yes か No かの問題である（cf. 森住「英語教育の根本を考える」横川博一編『現代英語教育の言語文化学的諸相』，三省堂，2001）。

- ある国や地域に行ったら，あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う。
- 国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。
- 少数民族や先住民族のことばは消滅しても仕方がない。
- ことばの学習はスキルの習熟に専念すればよい。
- 「英語が話せる＝国際人」である。
- 日本式英語の使用は恥ずかしいことではない。
- Queen's Englishは正当で美しい。
- 日本でも英語を「第二公用語」にしたほうが，国際通用力が増す。

このような視点を取り上げるのは重要である。なぜならば，ことばに対する興味・関心だけでなく，ことばのありように対する気づきも喚起させるからである。さらに，大切なことだが，外国語の知識や技

1 年
LESSON 8





能があっても，この視点を誤ると，相手を傷つけたり,陥れたりすることになる場合があるからである。つまり，知識や技能を使う前提の判断を誤ると，反国際的にもなるし，反人間的にもなる。しばしば，英語が堪能であっても「国際人」といえない人がいるのはこの由縁である。このように視点や言語観は，根本に関わっているので，言語教育の理念に関わる問題ともいえる。

本課の題材からみることばへの気づき

以上のような言語観や英語観がどのように *18NC* に具現されているだろうか。まず，本文の題材からみて主なものをいくつか取り上げたい。

1 年 第 8 課　Language Games

一方が相手の言語を学ぶだけの人間関係には真の平等はない。異文化理解もない。しばしば，英語のような大言語に対しては，この弊害に陥ることがある。この課では，「ことばって楽しいね」という気づきのもとに，久美（日本人）がポール（アメリカ人）に日本語を教え，ポールが久美に英語を教えている。つまり，ことばの学び合いである。さらに，日本語（漢字）の成り立ちや英語の word play も取り上げている。広い意味でのメタ認知・メタ言語能力を扱っている。この種のことばの由来やことば遊びを知っていれば，会話や文通などの動機付けになるし，話題づくりの一助にもなる。

1 年 LET'S READ 2　Alice and Humpty

アリスとハンプティー・ダンプティーとの有名な対話を取り上げている。

Does a name mean something?

— Of course it does. My name means my shape.

のやりとりは，指導の仕方によっては，意味論の相当深い気づきを与えることができる。自らの個性（identity）や存在理由（raison d'être）も考えさせることができる。簡単な英語で深い内容の提示という *NEW CROWN* が伝統的に志向してきた特徴の典型的な事例といえる。

2 年 第 1 課　Life in Australia

第 3 セクションで，オーストラリア英語の特徴に言及している。例として "Ta."（Thank you.）と "G'day mate."（Good day, mate.）を出している。これだけでも，オーストラリア英語の表現や発音について導入するきっかけになる。また，時間に余裕があれば，国際補助語としての 'Englishes' の言語観にまで言及できる。このような視点が中学時代

に生徒の中で育成されていれば，生徒は英語国やその他の外国を初めて訪れたときに，学校で習っている英語との違いに驚いたりしなくなる。

2年 第4課　Ainu

この課の最初のページでは，北海道の地名はアイヌ語に由来するものが多いことを取り上げている。これもことばへの気づきの一助になる。また，第3セクションのアイヌ語学習では，少数・先住民語を世界の財産として存続させたいと思う気持ちと互いの学び合いが底流にある。なお，本文には書けなかったが，アイヌ語の *Irankarapte*（イランカラプテ＝こんにちは）の原義は「あなたの心にちょっと触れさせてください」である。これは筆者の知る限り，世界で最も美しい由来を持つあいさつである。

3年 第8課　Sharing with Language

手話を使う人たちが登場する映画「アイ・ラブ・ピース」を見て，手話をはじめるようになったという内容の課である。メッセージは，手話への思い，表情やジェスチャーが大切なこと，たくさんの人たちと感情や意思を分かち合いたいという積極的コミュニケーションの姿勢である。そして，これが英語についても言えること，さらには，英語以外の言語，たとえば，中国語やヒンディー語，韓国・朝鮮語を習って，自分の世界観を豊かにしていきたいと結んでいる。まさに，ことばへの気づき，学んで使うという動機付けが満載の課である。

本課以外から見ることばへの気づき

教科書で本課以外という場合は，狭義では，本課に対立する活動部分である。*NEW CROWN* の現行版でいうならば，〈LET'S TALK，LET'S LISTEN〉などである。*18NC* にあてはめると〈DO IT〉である。広義では，見返しから始まって，〈WORD CORNER〉や〈SOUNDS〉，そして付録などすべてとなる。教科書がどのように構成されているかということなので，一般に「教科書構成」とも呼ばれる。ここでは，後者の広義からみて，題材に気づきや動機付けという点で言語学習の視点が色濃く出ているものを取り上げる。

2年 DO IT ― WRITE 1

「将来の夢は日本語教師です」

モデル文には，日本語教師になりたい理由として，

I like to talk with foreign people. I can teach them about Japan and Japanese culture. I can also learn many things about their lives and cultures.

とある。ことばを使って積極的にコミュニケーションをはかりたいという動機付け，教えるだけでなく自分も彼らから学びたいという双方向性が如実に出ている。

3年 DO IT ― LISTEN 4

「ことばを学ぶ意義は？」

タイトルを見ればわかるが，文字通り，外国語を学ぶ意義を取り上げている。それも，一般に題材が軟弱と言われるリスニングの活動として，である。その意義とは，外国語を学ぶことによって，相手の考え方を知る，文化を知る，自分の母語や文化がわかる，の3点である。まさに，ことばを学ぶ動機を真正面から取り上げている活動といえる。

〈表見返し〉

1，2，3年とも「ことばとコミュニケーション」を取り上げている。*NEW CROWN* は伝統的に，ことばへの気づきや学習の動機付けの視点から見返しを活用してきているが，*18NC* では，これをさらに強化して，この標題の下に，1年は「聞く・話す」，2年は「読む・書く」，3年は「表情・ジェスチャー」としている。各学年共通して日本語で書かれているメッセージは，「考える（Thinking）」を真ん中に据えて4技能で固めるというコミュニケーションのあり方を真正面から子どもたちに訴えている。暗記してもらいたい日本語のうちの1つである。写真からも何らかの気づきを得るに違いない。

〈裏見返し〉

1，2，3年とも「世界の言語」を取り上げている。これもことばを学習する際の視点に関係している。「英語」という「科目」は，「外国語」という「教科」を代表している。聞くところによると，韓国では選

表見返し

ことばとコミュニケーション［聞く・話す］ 1

人間は，いろいろなことを考えるときにことばを使います。また，その考えをおたがいに伝え合うときにもことばを使います。

日常生活でことばが使われるときは，聞く・話す・読む・書くなどのいろいろな活動の中で，さまざまな場面で使われています。人間はそうした場面を通しておたがいの関係を築いたり理解し合ったりしています。

ここでは，聞いたり話したりするときの場面を取り上げます。どのような場面でことばが使われているでしょうか。

択必修で他の6つの外国語を出すという。これができない我が国では，英語の授業を通して広く外国語への気づきを促すしか方法がない。

〈SOUNDS〉

18NC では，新しい試みを加えている。たとえば，2年の6ページである。‘Problem’ と ‘Thank you.’ あるいは ‘afternoon’ と ‘What's your name?’ のように単語と文を比べて，音節の数とリズムが同じであることを取り上げている。このような認知的な気づきが英語の理解につながり，学びたいという動機付けを促す。

〈単語の意味〉

「単語の意味」は *NEW CROWN* が伝統的に取り上げていて，他の教科書との「区別性」が著しい付録である。*18NC* では，さらに自分で辞書を調べるにはどうしたらよいか，というのを取り上げている。動機付けに役に立つ。

〈文法のまとめ〉

これも *NEW CROWN* 独特の扱いである。わかりやすさを追い求めた工夫を施した。特に，絵や図を通して文法や文型のしくみをわかりやすく説明している。Be 動詞や完了形などでは，従来の文法説明を越えた気づきも目指している。

おわりに

総じてみると，*NEW CROWN* はことばに関する題材が多い。今回は言及しなかったが，1年第1課の日本人の氏名の言い方も，英語を学ぶ上での視点や判断の問題である。また，3年最後の Reading Plus は，主たるテーマは人間教育の「勇気」であるが，本文はほぼ ‘courage’ の定義の羅列である。定義はことばによってなされるという点で，もともとことばの問題である。教育とは何か，人間とは何か，愛とは何かなどなど，すべてことばで考える。このように，*NEW CROWN* には，いたるところにことばへの気づきが仕掛けてある。その理由は，ことばへの気づきを多くすることが，英語教育が担うことばの教育としての権利と義務だからである。権利だから，ことばについての話題が多くてよいのである。義務だから，ことばについての話題が多くなくてはならないのである。これが，異文化理解教育や人間教育の点で，社会科や道徳との違いである。本教科書で，生徒たちと一緒にことばの大切さ，楽しさ，偉大さ，不思議さを存分に味わっていただきたい。